

化野出土の金銅製蓋付き陶製蔵骨器をめぐって

小檜山 一良

1. はじめに

化野^{あだしの}は、京都市の北西部・右京区嵯峨鳥居本化野町周辺、小倉山東北麓の二尊院から化野念仏寺にいたる一帯を指している。南東方向には嵯峨野の台地が広がり、その先には平安京が広がっている。

この化野は、「仇野」「阿陀志野」「阿大志野」とも記され、平安時代から鴨東の鳥部野、北の蓮台野とともに平安京の葬送の地であった。この地で法灯を繋ぐ化野念仏寺は、寺伝によれば、弘法大師の開創で五智如来寺と称し、大覚寺所轄

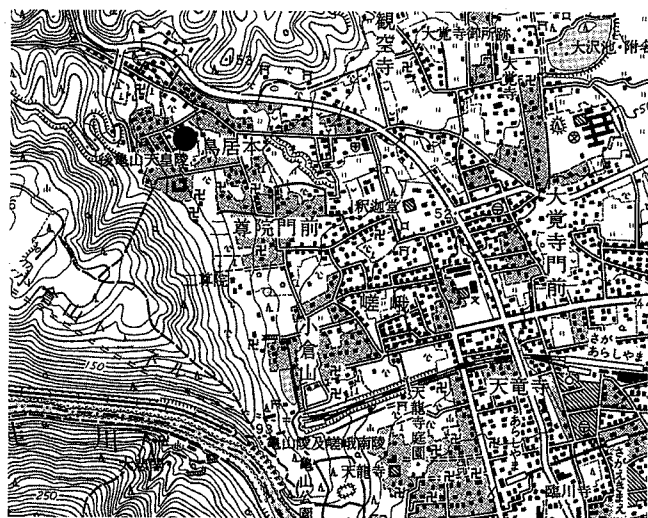


図1 化野の位置 (1:30,000)

の真言宗の寺であったが、鎌倉時代、法然上人が常念仏道場を開いたことから念仏寺と改称されたという。現在、寺の境内に祭られている数多くの石仏・石塔・板碑は、この化野の林野に散乱・埋没していたものを集めて安祀したもので、その数はおよそ八千体におよぶといわれている。

1993年、当研究所は史跡名勝嵐山内の化野念仏寺の南側一帯で、公共下水道工事を契機として化野地域では初めての埋蔵文化財の立会調査を実施した。この調査中の7月20日に、嵯峨鳥居本化野町12-32番地先の道路下で12世紀末の火葬墓を検出した。この火葬墓から出土した金銅製蓋付き陶製蔵骨器⁽¹⁾については、既に報告しているが、詳細について触れることができなかったため、ここで出土状態を含めて観察を行うとともに、この遺物のもつ諸問題について考えてみたい。この褐釉四耳壺は、中国の江南地方で日用容器として製作し、日本に輸入されたもので、日用雑器として広く使用されていたことが知られている。また、今回のように、火葬骨を納入する蔵骨器として使用した例もみられ、さらに経塚における埋経の際に、経筒を納める外容器として転用された例も知られている。まず、一連の調査で検出された墳墓に関連する遺構や遺物の分布をもとに、化野の墓域について推定してみたい。

2. 化野の墓域 (図2)

平安時代の墓制は、平安京では外延の山麓一帯に皇族の陵墓が広がり⁽²⁾「定葬送並放牧地事。山城国葛野郡一処。在五條荒木西里六条久受原里、四至東限西京極大路西南限大河、北限

上件両里北畔。紀伊郡一処。在十条下石原西外里十一条下佐比里十二条上佐比里、四至東限路並古河流末、西南並限大河、北限京南大路西末並悲田院南沼。」⁽³⁾と京域外周に接して庶民の墓が広がるという墓域設定がなされ、「凡皇都及道路側近並不得埋葬。」⁽⁴⁾と京内に遺体を埋葬することを禁じていた。

平安京では、屍のもつ『穢れ』を忌み嫌い、これを避けるために京内における埋葬を禁じ、京の郊外、化野・鳥部野などを葬送地として設定した。しかし、平安時代中期以降、平安京の変貌とともに、葬送に関する規制も変化を見せていく。

それを示すように、平安京西郊地域では、嵯峨野、宇多野に皇族の陵墓が設置され⁽⁵⁾、庶民の墓は京域外周の常盤東ノ町、常盤仲之町、太秦馬塚町などに土壙墓として広く展開している⁽⁶⁾。例は少ないが、京内右京域では平安時代中期以降の木棺墓⁽⁷⁾が検出されており、造墓の規制に変化がみられ始める。そして鎌倉時代以降には、東本願寺前古墓群⁽⁸⁾をはじめとして京内にも蔵骨器に播鉢・瓦器鍋などの日用品を転用した多数の土壙墓が営まれていたことが明らかになっている。

葬送地「あだし野」は、標高284mの小倉山の東北麓に広がりをもつが、その範囲は概念的なもので、確定されている範囲ではない。図2は大正11年の都市計画図の等高線に化野念仏寺、二尊院など寺院、有智子内親王墓、後

亀山天皇小倉陵、愛宕道などを記載し、墓跡や遺物の検出された地点を明示した図である。化野念仏寺の南東に東向きの緩斜面が広がる地形が表れており、ここに墳墓に関連した遺構が点在している。この図を基にして、大まかな墓域を推定してみると、まず、北限は境内で蔵骨器が出⁽⁹⁾土していることや、谷によって画される地形を考慮して、化野念仏寺北側の谷を想定することができる。西限は、小倉山の東斜面部で、化野念仏寺の西側の標高120m、二尊院の西側では標高100mまでとする。この標高で等高線の変換がみられ、これより上方の急斜面は造墓には適していない。南限は、境内の隣接地で火葬墓⁽¹⁰⁾が検出されていることから、常寂光寺南側の谷によって画されると想定する。東限に関しては調査例

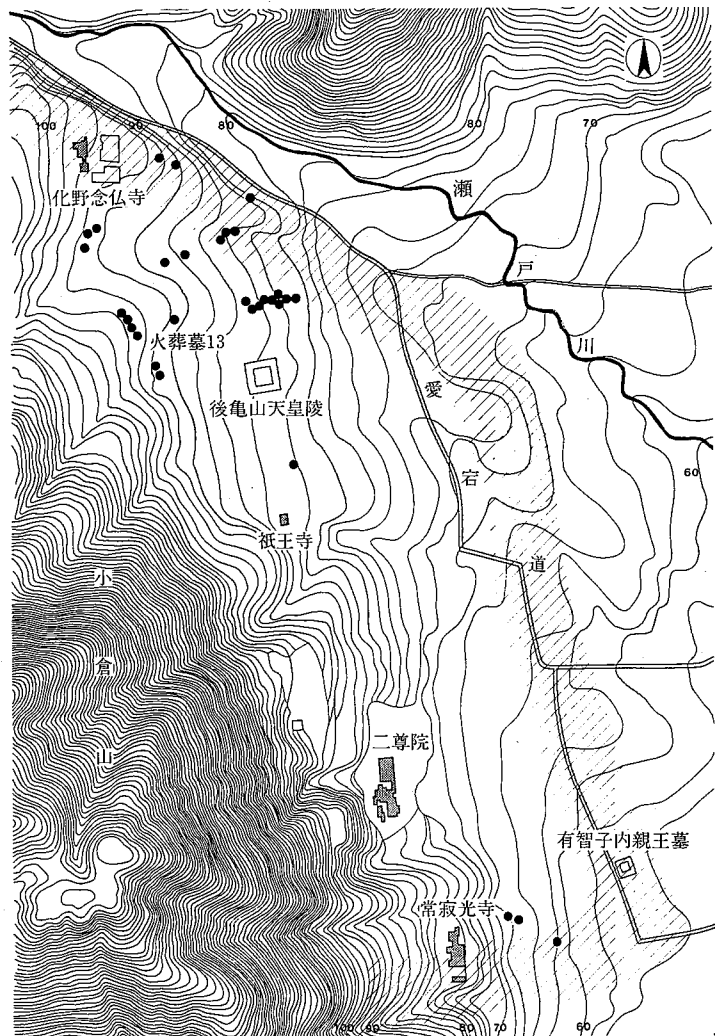


図2 化野の墓域推定図 (1 : 7,500)

がなく、地形から推測すると標高58mに立地する有智子内親王墓を含む愛宕道辺りとなる。

化野念仏寺の北側から常寂光寺の南側まで広がる墓域は、地形上では祇王寺南側の谷で南北に2分することができる。北部は、化野念仏寺南側からこの谷まで広がっている比較的なだらかな東方に向かう斜面部であり、南部は、狭小な平坦部に二尊院や常寂光寺など寺院が立地する小倉山裾部の急斜面部である。二尊院境内には鎌倉時代に造立された三帝の塔や古墓が所在し、常寂光寺では境内に隣接して数基の火葬墓が検出されており、いずれも寺院に付属する墓地が広がるとみられる。これに対し、北部では標高80mから97m、南北約330m、東西約170mの範囲内で平安時代から江戸時代に属する多くの遺物や各種の古墓がとくに寺院に付属せず緩斜面上に点在し、明らかに南部の墓地とは性格が異なっているとみられる。以上のことから、化野の埋葬は、平安時代の小石室をもつ火葬墓の造営にはじまり⁽¹¹⁾、それ以降は火葬墓と土葬墓の混在する造墓が継続され、南北2つの形態の墓域が融合して形成されたものとみられる。

また、化野で出土した蔵骨器には、化野念仏寺境内での13世紀前半の古瀬戸灰釉四耳壺⁽¹²⁾、境内周辺では同時期の常滑三筋壺⁽¹³⁾や、14世紀の信楽片口壺⁽¹⁴⁾などがあり、14世紀までの蔵骨器は、ほとんどの例が陶器壺類を使用したものである。この傾向は、京内の土壙墓から出土する播鉢・瓦器鍋などの日用品を転用した蔵骨器⁽¹⁵⁾とは対照的なもので、この時期の化野における被葬者の属した階層の差異の現れとみることもできる。

3. 金銅製蓋付き陶製蔵骨器の出土 (図3)

化野の緩やかな東向き斜面上の標高96m地点で、多数の石材とともに円盤状の金属製品、陶器壺片と火葬骨片などが出土した。これらの散乱した遺物を採取したのち、既に原位置を保っていない石材や土砂を排除し、火葬墓13 (図3) を検出した。この地点は、先に想定した化野の墓域の北西部に位置し、既に報告している15基の墓跡の中では最も標高の高い位置である。

この火葬墓は、幅1.5m、深さ0.5mの掘形内に、自然石を組み合わせ一辺約0.7mの方形の小石室を築いた構造である。掘形の底部には炭層が約0.1mの厚さで敷き詰められており、石室を構成する石材の上部にも厚さ約0.1mの炭層が石室を覆うようにして堆積していた。さらに、この墓壙に切られる状態で、厚さ数cmの暗赤色の焼土層を検出した。この焼土の堆積層は、この場所が火葬所でもあったことを示しているものと思われる。また、掘削工事中に出土した多数の石材は石室を構成していたもので、検出時の状況からすると、既に石室内には土砂が流入していたものと思われる。なお、この石室の上部は、地表下わずか0.45mの位置であり、既に墳墓の上部は削平されていた。

今回取り上げる金銅製品および陶器壺は、この火葬墓の小石室内から出土した遺物で、蔵骨器に使用された褐

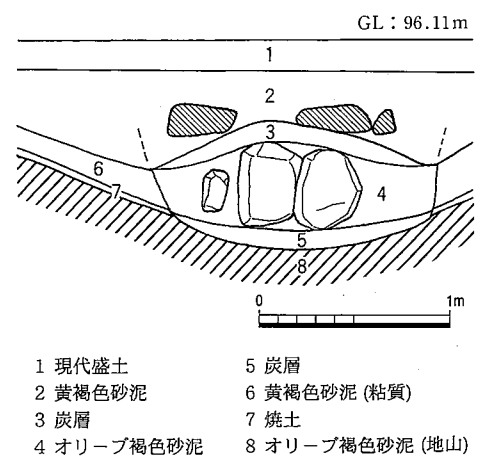


図3 火葬墓13断面図

釉陶器四耳壺（1）と、それに伴う金銅製の蓋である。出土時の蓋は、土と緑青に覆われていたが、後の水洗いの際に鍍金部分が一部現われたため、金銅製品であることが判明した。後日、保存処理の過程で蓋上面に施された線彫りの図案が明らかになった。また、小破片になった四耳壺片は、水洗い後に接合し、欠損部分は、石膏と彩色によって復原した。

4. 金銅製蓋付き陶製蔵骨器の観察（図4）

褐釉陶器四耳壺（1） 広口、広底で樽型の形態で、器高のほぼ中位に最大径がある。口縁部は「く」字状に短く外反し、頸部下に2条の凹線を施し、その上に4個の横形の耳を貼り付けるが、うち1個は焼成中に欠落したとみられる。内面から胴部外面上半は横ナデ、外面下半は回転ケズリを施し、底部は輪状の高台で、口縁部内面と底部付近には目跡が残る。内外面ともに浅黄色の釉を施し、胴部上位には黒褐色の鉄釉をかけ流す。この釉はよく溶けず、やや濁った感じの色である。器高20.8cm、口径9.1cm、胴部最大径14.4cm、底部径6.7cmを測る。胎土は径0.5～2mm大の暗赤褐色の粒子を多く含む。断面はにぶい赤褐色を呈し、焼成は良好である。口縁部外面には金銅製蓋による緑青が付着し、中には火葬骨と炭化物を納めていた。中国の江南地方で作られ、輸入されたものであり、その中でも器面がなめらかで、釉の発色も良く、優品の部類に属する。陶製蔵骨器の蓋には、陶磁器椀類や石を利用する例が多く、金銅製品は前例がみられない。なお、この壺は破片断面および火葬骨や炭化物など内容物の状態からも、出土時以前は完形を保っていたとみられる。

金銅製蓋 銅製で円形の蓋上面に、蓮華座上に梵字の「𑖀」字を乗せた図案を線彫りして鍍金したものである。直径10.1cm、高さ1.0cm、厚さ0.1cmを測る。蓋内面には四耳壺口縁部との接触痕が鮮明に残り、壺に被せるとサイズは一致する。蓋上面に施された線彫りは、蓮華座の細部の表現が大らかで、「𑖀」字は丁寧に描かれている。この図案は、密教での「阿字観」を行う際の本尊「月輪中蓮華上阿字」⁽¹⁶⁾と同様のものとみられる。金銅製の蓋は、金銅製蔵骨器の蓋としては例があるが、陶製蔵骨器の蓋としては前例のないものである。この製品は銅製経筒の蓋の形状にも類似しているが、「𑖀」字は大日如来を現わすことから、経筒の蓋に「𑖀」字が施されることは考えにくく、この蓋の口径が蔵骨器の口径と一致することから、転用したものではなく、この蔵骨器の蓋として特別に製作したものとみられる。

この金銅製蓋の銅の質は、極上・上・並と分類すると並の部類にはいり、鍍金の方法は線彫り部分にアマルガムを塗布したのち水銀を蒸発させるもので、はみ出した部分を粗く掻き取って仕上げたものである。この製品の材質や仕上げの状態からは、やや急拵えの印象を受ける。蓋の上面に施された線彫りは、細部の表現は大らかで、蓮華座の

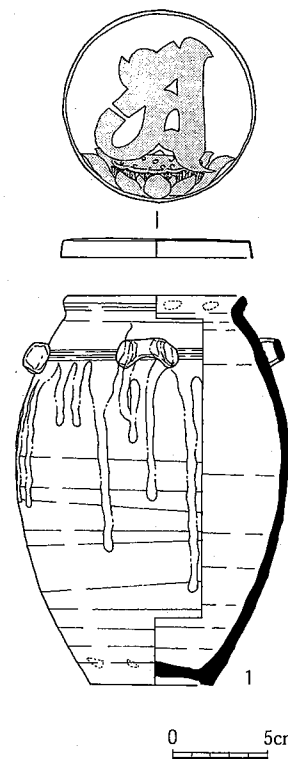


図4 金銅製蓋・褐釉四耳壺

表現法としては古い様相を残しており、「**蓋**」字が丁寧に描かれていることは、12世紀後半代の仏教関連諸工芸の特徴を示している。また、この蓋の形状は12世紀後半代の量産和鏡と類似し、同様の技法で作られており、この蓋は褐釉四耳壺の時期と矛盾しない⁽¹⁷⁾。最近、J R 京都駅周辺での発掘調査⁽¹⁸⁾によって仏具、鏡等の鑄造や製作に関わるとみられる遺構・遺物が相次いで検出され、仏具関係の工房の存在が実証されており、この蓋の製作地は七条仏所と想定した。

5. 他地域の褐釉四耳壺の類例 (図5 表1)

褐釉四耳壺は蔵骨器としてだけでなく、経筒の外容器や日常容器として使用されたものがある。これらの褐釉四耳壺は他地域でも出土しており (図5 表1)、ここでは西日本の類例と比較してみたい。尚、それぞれの四耳壺の観察と出土遺構は各報告によった。

始めに、今回の例と同様に蔵骨器としての使用例をみしてみる。蔵骨器の蓋に、陶磁器碗や石を利用する例が知られている。

熊本県多良木町の球磨川畔右岸に位置する蓮花寺跡⁽¹⁹⁾では、境内の北側に位置する石積基壇上の五輪塔下から褐釉四耳壺 (17) が出土している。石積基壇を掘窪めた墓壇に蔵骨器として埋納していたもので、蓋には扁平な川原石を利用していた。化野の例と同形態で、胴部上半に太い凹線による波状文を施し、胴部下半は縦方向のヘラケズリを施す。釉は黄緑の強い黄褐色で、口縁部から右回りに胴部にかけて一周する鉄釉をかけ流している。器壁は比較的厚い造りで、素地は黄茶色の軟質である。器面には火膨れが認められる。

佐賀県東脊振村の脊振山中腹の標高約500mに位置する霊仙寺跡⁽²⁰⁾の墓地では、狭い尾根上に位置する礫囲状の火葬墓や石壘状の外部施設をもつ火葬墓から褐釉四耳壺 (14・15) が出土している。蔵骨器の蓋には自然石を利用したとみられる。(15) は化野の例と同形態で胴部が丸く張り、内外面に厚く褐色の釉がかかる。高台は削り出しで、口縁部と胴下部に目跡が残る。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。大型の (14) は釉調は灰茶色を呈し、胴部上位で三箇所を垂らす。頸部下の2条の凹線は痕跡程度で、調整も比較的雑である。胎土には粗砂粒が多く、焼成は普通である。

福岡県久留米市の兜山の北麓に位置する永勝寺では、埋納遺構の構造は不明であるが、白磁碗を蓋とした蔵骨器が出土⁽²¹⁾している。この褐釉四耳壺 (6) は蔵骨器として使用されたものである。四耳壺および碗の胎土の露出している部分が木炭で黒く染まっており、埋納時には蔵骨器の周囲に木炭が埋められていたとみられている。この褐釉四耳壺は、平坦な底部から、体部が内湾気味に立ち上がる。肩部は強く張り、やや長い頸部は外反してのび、端部は玉縁状を呈している。

京都市内の例では、1981年の京都大学教養部構内の発掘調査⁽²²⁾で、多数の土壙墓のなかに褐釉四耳壺を用いた2基の土壙墓が検出されている。この褐釉四耳壺 (7) は、頸部は短く外反し、肩部が張り、体部下半は幅広いヘラケズリを施す。張り出した肩部に波状文と直線文を施している。

佐賀県鹿島市の能古見町水梨で、褐釉四耳壺が2個出土⁽²³⁾している。報告ではこれらの褐釉四耳壺 (8・9) は、蔵骨器の可能性もたれている。器形は肩部の張りが弱く、頸部は内傾し端部

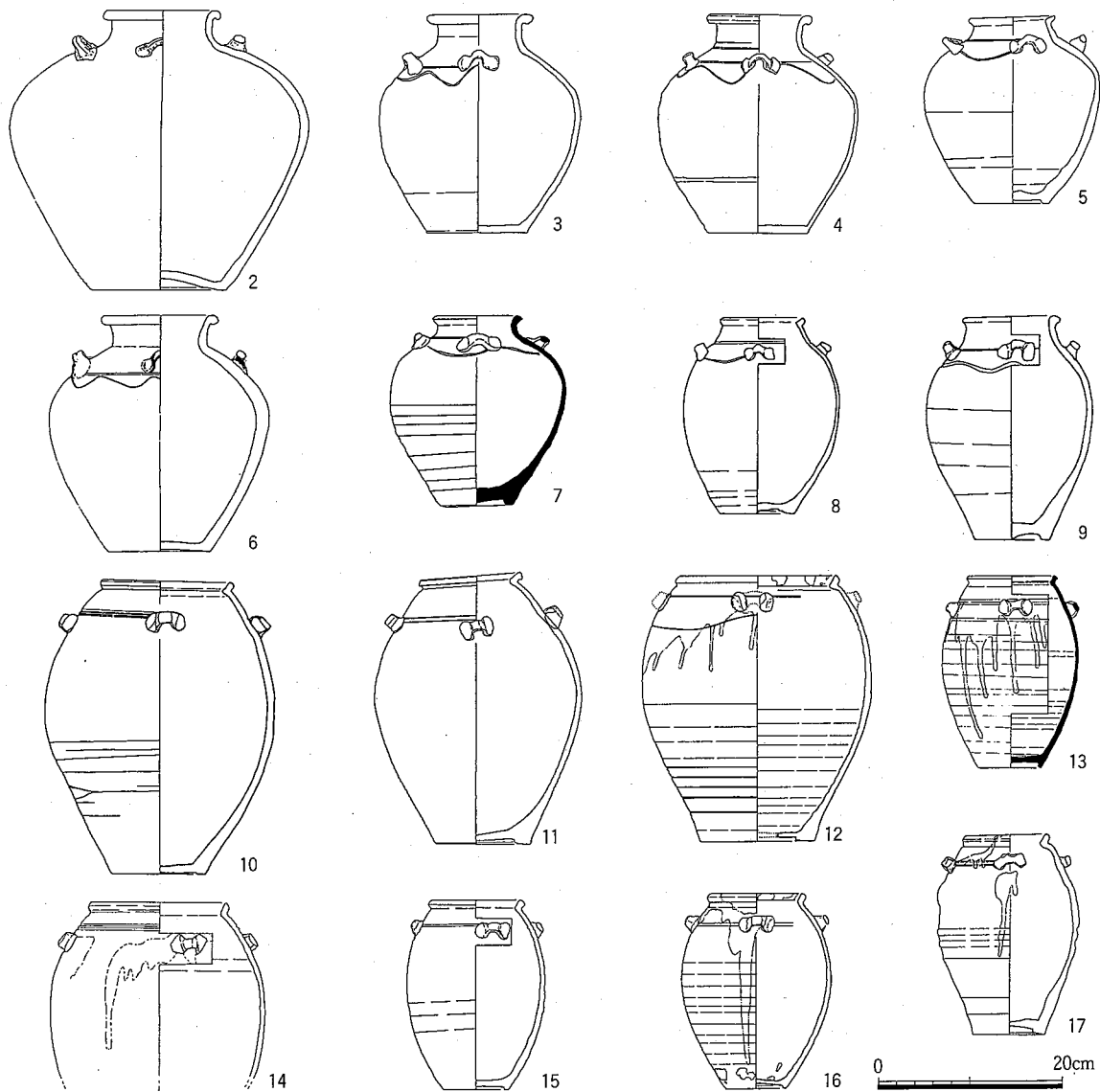


図5 他地域出土の褐釉四耳壺実測図（1：8）

番号	使用例	遺跡名	出土地	時期
1	蔵骨器	化野	京都市右京区	12世紀末
2	不明	英彦山神社	福岡県田川郡添田町	12世紀代
3	経筒外容器	片山経塚	佐賀県鹿島市	12世紀
4	舍利外容器	於美阿志神社	奈良県高市郡明日香村	12世紀
5	経容器	松田経塚	福岡県京都郡勝山町	12世紀
6	蔵骨器	永勝寺	福岡県久留米市	12世紀
7	蔵骨器	京都大学構内遺跡	京都市左京区	12世紀代
8	蔵骨器	水梨経塚	佐賀県鹿島市	12世紀
9	蔵骨器	水梨経塚	佐賀県鹿島市	12世紀
10	経筒外容器	高田山寺ノ峯経塚	島根県隠岐郡西ノ島町	12世紀
11	経筒外容器	神原経塚	島根県大原郡加茂町	12世紀
12	生活用品	太宰府左廊五条五坊	福岡県太宰府市	13世紀中頃
13	生活用品	平安京左京八条三坊	京都市下京区	13世紀前半
14	蔵骨器	霊仙寺跡	佐賀県神埼郡東背振村	13世紀後半
15	蔵骨器	霊仙寺跡	佐賀県神埼郡東背振村	13世紀後半
16	生活用品	太宰府左廊五条五坊	福岡県太宰府市	13世紀中頃
17	蔵骨器	蓮華寺跡	熊本県球磨郡多良木町	13世紀後半

*時期については各報告例に基づいている。

表1 褐釉四耳壺出土地名表

で外反しており、(7)と(1)の中間的な形態をしている。

福岡県添田町の英彦山神社内の斜面で、正方形の小石室内から多くの木炭、刀子1口とともに、中央に安置された褐釉四耳壺が出土⁽²⁴⁾した。この四耳壺(2)は、短頸広肩で、底部は荒い削りはなしの上げ底である。口縁は外側に反転し下方に巻き込むようになるので、外観は玉縁状を呈する。胎土は硬い陶質で赤褐色から灰黄色を呈し、釉薬がなじまないため剥落しやすい。全面に褐黄色の釉薬をかけ濃淡の多い発色で、釉面に細貫入が多くみられる。四耳壺は、四角く加工された滑石製の蓋をともなうが中には何も納められていないため用途は不明であるが、報告者は経筒外容器の可能性を示唆している。

経塚における出土例も知られている。経塚に教典を納める陶製経筒といわれるものには、経筒用として製作された専用品と、本来他の使用目的をもった容器を経筒に転用したものがあり、この褐釉四耳壺は経筒外容器として転用された例が報告されている。これらの褐釉四耳壺には、やや古い形態のものが多くみられる。

島根県西ノ島町の高田山寺ノ峯経塚⁽²⁵⁾では、集石塚上で和鏡3面、北宋銭、青白磁合子などとともに褐釉四耳壺(10)が出土している。さらに、同県加茂町の神原経塚⁽²⁶⁾でも同じ形態の褐釉四耳壺(11)の出土例がある。これらの褐釉四耳壺は大型のもで、器形は樽型を呈し、胴部の張りが強い。頸部の下には直線文が1条施されている。

福岡県勝山町の松田経塚では、大治二年(1127)銘の鑄銅製経筒の外容器⁽²⁷⁾として褐釉四耳壺が使用されている。この四耳壺(5)は灰色の素地に褐色釉をかけたもので、器壁には釉の剥落がみられる。胴部はヘラケズリ調整で、底部も荒く削り出し、目跡がついている。この四耳壺の形態は(6)に類似し、張り出した肩部に波状文を施している。

佐賀県鹿島市の片山1号経塚⁽²⁸⁾でも、銅板製経筒の外容器として褐釉四耳壺が転用されている。この四耳壺(3)の形態も(6)に類似し、張り出した肩部に波状文を施している。

褐釉四耳壺は、消費地遺跡での出土例も数多くみられている。1985年の平安京左京八条三坊七町の発掘調査⁽²⁹⁾では、土壙、柱穴、溝や多数の井戸が検出されており、方形の木枠井戸から、土師器、瓦器、焼締陶器、漆器、瓦類、輸入品の青磁、白磁などとともに褐釉四耳壺が出土している。この地は、七条町や八条院町の近接地として職人の住居や工房等が散在していた地域とみられ、この褐釉四耳壺(13)は日用雑器として使用された後、井戸に廃棄されたと考えられている。形態は化野で出土したものと同様である。内外面の釉、胴部上位にかけ流した黒褐色の鉄釉は、よく熔けず濁った感じの色である。この四耳壺(13)は破片を接合して完形となったものであるが、他にも、京内の遺跡からは褐釉四耳壺の破片が多数出土している。

また、1981年の福岡県の太宰府左郭五条五坊の発掘調査⁽³⁰⁾では、隅丸長方形の土壙から褐釉四耳壺49個体以上を含む輸入陶磁器が多量に出土している。これらの中には貯蔵容器が多く、完形品は1個体も含まれておらず、商品として流通する途中で破損したために一括して廃棄された遺物と考えられている。褐釉四耳壺(16)の形態は、化野で出土したものと同様である。内外面に施した釉は淡灰褐色、淡茶灰色などの薄い色調に発色するものが多い。また灰白色、黄灰色に

濁るものが多く、釉は光沢のないものが大半である。また、大型の(12)の出土もみられる。

他に、塔の基壇内から出土した特殊な例もみられる。奈良県明日香村の於美阿志神社十三重塔々基から舍利容器とした白磁小壺を納めた外容器として褐釉四耳壺⁽³¹⁾が出土している。この褐釉四耳壺(4)の形態は(6)に類似しており、張り出した肩部に波状文と直線文を施している。

この褐釉四耳壺の形態は、古い時期のものは、体部の最大径部が器高の上位に位置し、肩部の張り出しは強く、頸部はやや長く外反してのび、端部は玉縁状を呈する。肩部には凹線による波状文と直線文を施している。時期が降ると体部の最大径部は下方に移り、ほぼ器高の中位となり、肩部の張りは弱く、頸部も短くなる。やがて、本例のように樽型の器形になり、肩部に施した文様は、直線文のみとなる。

褐釉四耳壺の時期については、報告例によりまちまちである。上記した褐釉四耳壺のなかで、化野で出土したものと同形態のものが、平安京左京八条三坊の井戸出土(13)では13世紀前半代、太宰府左郭五条五坊の土壙出土(16)では13世紀中頃、佐賀県の霊仙寺跡出土(15)・熊本県の蓮花寺跡出土(17)では13世紀後半代の時期が、それぞれに想定されている。今回の例は、平安京左京八条三坊の井戸から出土した褐釉四耳壺に最も近く、これは13世紀前半代と考えられているが、伝世幅や金銅製蓋との関連からこの褐釉四耳壺の蔵骨器としての使用年代は12世紀末と位置付けておきたい。これらの褐釉四耳壺については、報告例から検討して国内での使用年代を12世紀末から13世紀末頃までと認識した。また、古い形態を示す福岡県勝山町の松田経塚出土の褐釉四耳壺(5)については、11世紀後半まで遡る可能性もあると報告されている。

6. まとめ

以上の検討から、この褐釉四耳壺についてまとめると

- ・中国から他の陶磁器類とともに日用雑器として多く輸入されたもので、当時の盛んな海外との交易活動の一端を示している。
- ・消費地遺跡で日常の容器として使用されているが、一方で、この四耳壺の広口・広底という形態や大きさが適当であるため、蔵骨器・経容器として使用される例がみられ、準専用容器的な性格をもっていたと考えられる。
- ・経筒の外容器に使用される場合は、大型で胴部の張りが強い形態のものや、張り出した肩部に波状文を施すものがある。これらは本例と同形態のものよりいずれも古い時期のものである。
- ・経塚の形態が火葬墓に取り入れられていく過程で、古い形態の褐釉四耳壺に加え、本例の新しい形態の壺が蔵骨器として使用されていく傾向がみてとれる。
- ・この褐釉四耳壺を用いた火葬墓の小石室は、化野では12世紀末には確認され、西日本において報告されている12世紀後半以降の経塚の遺構とはほぼ同様の構造をしている。
- ・この火葬墓の形態は、経塚の形態が蔵骨器を伴う中世墳墓に取り入れられる過渡期にあたる⁽³²⁾。
- ・火葬墓に埋納された陶製蔵骨器に、専用の金銅製蓋を伴う例は目下のところ他にない。
- ・化野出土の褐釉四耳壺は12世紀末に蔵骨器として使用されたものである。

尚、本稿の作成にあたっては、永田信一氏、出水みゆき氏にご教示ならびにご協力いただいた。記して感謝いたします。

註

- (1) 小椋山一良「史跡名勝嵐山」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- (2) 『延喜式』卷二十一 諸陵寮
- (3) 『類聚三代格』卷十六 山野菟澤江河池沼事 太政官符
- (4) 『令義解』喪葬令第二十六 皇都条
- (5) 嵯峨天皇、文徳天皇、光孝天皇、村上天皇、円融天皇などの陵墓が設置されている。
- (6) 鈴木廣司他『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告-I (財)京都市埋蔵文化財研究所 1977年
鈴木廣司他『常盤仲ノ町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告-III (財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
平田泰他「常盤東ノ町古墳群・仁和寺院家跡・広隆寺旧境内」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- (7) 堀内明博「平安京右京五条二坊」『平安京跡発掘調査報告』昭和55年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1981年
平尾政幸『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1990年
- (8) 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報 I』1974、75年度 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980年
- (9) 乗安和二三「化野念仏寺境内出土の蔵骨壺」『古代文化』28-9 1976年
- (10) 平成7年度の調査で、江戸時代の火葬墓が検出されている。未報告。
- (11) 平成7年度の調査で常寂光寺の隣接地で検出された土壌は小石室をもち、平安時代前期の緑釉陶器片が出土している。この遺構は、構造・規模からみて火葬墓跡の可能性が高く、葬送の地「あだし野」の起源が平安時代前期にまで遡ることが考えられる。未報告。
- (12) 乗安和二三「化野念仏寺境内出土の蔵骨壺」『古代文化』28-9 1976年
- (13) 小椋山一良「史跡名勝嵐山」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- (14) 渡辺和義氏蔵。『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- (15) 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報 I』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980年
- (16) 密教でいう「阿字観」とは、梵字「𑖀」字に対座して行う瞑想法のことである。その行法には、本例の「月輪中蓮華上𑖀字」の金剛界・阿字観本尊と、「蓮華上月輪中𑖀字」の胎蔵界・阿字観本尊がある。密教辞典編纂会『密教大辞典』縮刷版 法蔵館 1983年
- (17) 京都国立博物館の久保智康氏の御教示による。
- (18) 木下保明「平安京左京八条三坊2」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年 ほか

- (19) 隅昭志他『蓮花寺跡・相良頼景館跡』熊本県文化財調査報告書第二十二集 熊本県教育委員会・熊本県文化財保護協会 1977年
- (20) 田平徳栄他『靈仙寺跡』東脊振村文化財調査報告書第4集 佐賀県東脊振村教育委員会 1980年
- (21) 小田富士雄他「筑後柳坂山永勝寺の遺跡」『史迹と美術』33-2 1963年
- (22) 五十川伸矢他「京都大学教養部構内A P 22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和57年度 京都大学埋蔵文化財研究センター 1984年
- (23) 『佐賀県の経塚』佐賀県教育委員会 1970年
- (24) 渡辺正気「英彦山発見褐釉四耳壺埋納の小石室」・小田富士雄「英彦山資料解説・考古資料『研究紀要1』特集・豊前修験道 北九州市立歴史博物館 1979年
- (25) 『鳥根県埋蔵文化財調査報告』第Ⅲ集 鳥根県教育委員会 1971年
- (26) 『鳥根県埋蔵文化財調査報告』第Ⅲ集 鳥根県教育委員会 1971年
- (27) 長谷部楽爾編『世界陶磁全集 12 宋』小学館 1977年
- (28) 『佐賀県の経塚』佐賀県教育委員会 1970年
- (29) 上村憲章・小森俊寛「平安京左京八条三坊」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1988年
- (30) 山本信夫他『太宰府条坊跡Ⅲ』太宰府市の文化財第8集 太宰府市教育委員会 1984年
- (31) 東京国立博物館編『日本出土の中国陶磁』東京美術 1978年
- (32) 杉原和男氏によれば、京都府北部の約80件の経塚および墳墓出土資料を検討した結果、特に、遺構と容器の配置や関連を中心にみた場合、経塚と墳墓の区別が以外に判別できない遺跡が多いことが指摘されている。「経塚と墳墓—丹波・丹後を中心とした筒型容器出土の遺跡について—」『考古学雑誌』74-4 1989年